

広い背巾

伸びた背筋

古い記憶は悩ましく

S

その日の暖かさは愉快といつても過言ではなかった。旧灼熱地獄たるその竈は常に亡者を焼くほどの温度だが、それでも暖かいという感想を抱くのは、地上に出ていくことが多くなつた昨今のためだろう、と寝返りで目を覚ましたお燐はあくび混じりに考え、いや、それは自分の勘違いじゃないかしらん、実際問題、今日は暑すぎるぞ、とあくびのまま舌を出した。

お空のせいに違いない。首元をゆるめて、お燐は今や熱源そのものとさえ言える友鳥のもとへ鼻先を向けた。地霊殿の寝床を抜けだし、旧都から旧地獄に潜り込めば、もはや沸騰しているとしか思えない大気がやってくる。暑い暑いと舌を出して文句を言つても、聞くべき鳥はまだ見えない。いつもにまして歪む蜃気楼は見たこともない獣のようだ。それにしても、暑い。暑すぎやしまいか？

「いや何コレ」

既視感は一瞬だった。巫女と魔法使いが陽炎を軽や

かに避ける姿が歪む視界の先に見えたような気がして、しかし、それは過去の熾り火として消えていく。お燐は一声鳴いて服を脱ぐと、火車を押し熱の下、エネルギーの位相、地獄の住民だけが住まう帯域を進んだ。暑さはもう感じない。いいや、実際のところ大変暑いことこの上ないが、それよりも灼熱の奥に輝く鳥のことが気になつた。

太陽は地の底に、いま、顕れている。深奥にして中樞の火、古き陽光はその無造尽な火力を身のうちに起こし、漏れる熱量は地獄をなにももたどりつけない聖域にさせている。そうして一日ぶりにあつた鳥は、変わらぬ様子で眠っていた。

「やおお燐！」

だからこのように親しげに声をかけてくる鳥は、自分の知っているお空などではない。いくら阿呆に羽が生えているとは言え、眠っているのを忘れてやあ今日は蠱惑的だねなど言つて来るものかとお燐は猫背になり、鼻提灯を膨らませて白目を剥いている鳥が友達だと言つていた過去を後悔した。

S

「お空を起こさねばなりません」

サランに腰布、捻り鉢巻に右手は団扇、かつかしな
がら牙を剥き出して地霊殿に乗り込んできた鬼の勇戯
に対してサトリは全てを無視して言い放ち、

「閻魔を呼びます」

「この暑さはなんだ！　なんだ?!　なんだってえ!」

「服、着て下さい」

「質問に答えろ！」

「はい、貴方は馬鹿です」

「そうか。ヌウ」

このやり取りだけで、さとりと勇儀の大まかな意志
疎通は完了した。

地霊殿の、陰鬱とした薄暗い広間は今現在蒸し風呂
もかくやの状態になっている。はたしてそれは地霊殿
の存在する地下世界そのものにまで及び、しかしなが
ら主であるさとりは大した問題ではないという顔で椅子
に腰掛けたままだった。

「八咫鳥が調子にのることは、あるともないとも言
切れません。現実におきかたからそういうことも
あるだろう、という程度の認識でしかなかった」

「あ？　なんのことだ」

「あなたの疑問です。言ってみてください」

「なぜ閻魔なんぞよばにやならん」

鬼の勇儀はどっかと床に胡坐をかいて、背を伸ばし、

頭をあげ、さとりの目を見据えた。おなじようにさと
りは顔を俯かせて正面から鬼の目を覗き込む。そうい
う動作、心を読む妖怪を恐れる事もせず、どうどうと
正面から対峙できるのは地下世界でも鬼ぐらいのもの
で、それがあから勇儀は旧都の頭のような立場にい
るのだろうかさとりは考えていた。実際のところ、彼
女の心を読む意義は薄い。思考の段階で物事を判断し
ていないからで、そうはいっても長い付き合いの上か
らか、考えそうな事は想像できる。古明地さとりが相
手の考えを想像するという行為は、彼女から学んだと
いっていい。

「火は陽の落とし子である」

ふうと地霊殿の主、古明地さとりは額の汗をぬぐい、
足もとを突っ込んでいる冷水の桶がぬるくなってきた
なと思いつながら、

「あの炎は神です。神であるものを揺るがせられるの
は、人か、神しかない。『さとり』である私や、
『鬼』であるあなたには何も出来ない。それが、世の
理、我々がこの地に住まう理由の一つ」

「腹が減ったな」

「そうですね。しかし閻魔は違う。裁けないものは何
も無い。裁くことしかできない、と言いつ換えてもいい。
あらゆる法則を無視した、上位的存在からの強制力で

「全くもう……なんでこの私がっ」

硬い靴音を響かせながら、楽園の最高裁判長である四季映姫・ヤマザナドゥはひとりゴチていた。硬い床、硬い壁、硬い天井。全てが厳肅に編まれた廊下はその声すらも無情に弾き、自ら放った言葉に貫かれては映姫の顔も余計に歪む。

ここは楽園の最高裁判所——ではない。

京都担当である閻魔が不在の間、代理として映姫が派遣され、かれこれ三日が過ぎようとしていた。

基本的に人口が少なく、それが故に仕事もなく、暇を持って余しては現世で説教を行っていた映姫であったが、流石に首都として栄える京都においてはそんな余裕など欠片もない。職務に忙殺され、こちらに赴任してからというもの碌に眠れぬ夜を過ごしていた。己が職務に殉じることが誇りとする映姫であるが、流石に疲労が蓄積し、思わず愚痴のひとつも零れてしまう。そんな自分に嫌気が差し、尚のこと苛立つという終わりなき悪循環。これでは自然と足音も、荒いものにならざるを得ない。

足を止め、息を吐く。

思考をフラットに戻そうと、もう一度深く息を吸い込んだ瞬間——背後からばたばたという足音が聞こえてきた。

「四季さま~~~~~！ 待つてくださいよう~~~~~」

間延びした声に振り返れば、秘書官である芹生が資料を両手に山と抱えて駆けてくるのが見えた。京都なら「せりお」じゃなく「せりよう」だろうと思わなくてもなかつたが、人の名前に突っ込むのも無粋と首を振り、こほん咳払いをして居住まいを正す。

「失礼。少し急ぎ過ぎましたね。申し訳ありません」

やつとの思いで追いつき、息を切らせていた芹生だが、頭を下げる映姫を見た途端、目を白黒させてぶんと首を振った。

「ちょ!?! 謝らないでください恐れ多い！ それもこれもみんな私がトロいのがいけないのです！ 四季様が頭を下げる必要など……」

「いえ、先の方は荒ぶる感情に身を任せ、ついつい先を急いでしまいました。周囲を顧みず、感情に流されるなど閻魔として恥ずべきこと。特に貴方には迷惑を掛けてしまったようです。本当に申し訳ありませんでした」

「いえいえっ！ 四季様はぜんぜんまったたく悪くあり

「いませんっ！ 私つてば昔から何をやらせてもトロくてみんなに馬鹿にされてましたし……八代様に目を掛けて頂けなかったら私なんて……ですから全て私が悪いのです。四季様に非などあるはずも……」

「いえいえいえ、部下の力量を見極め、それに合わせるのが上司としての責務です。無論、ただ怠けていたというのであれば叱責することもあるでしょうが、貴方は一生懸命やっているじゃないですか。今回の件は私情によって余裕をなくし、部下の状況を見極めることのできなかつた、いえ見極めようとしなかつた、私の落ち度なのです。そのように貴方が徒に己を責めることなんて……」

——うん、君たちウザい。

もしも全てを見通す神が存在するなら、そのように思ったであろう鬱陶しい会話は、まだまだまだまだ続いている。真面目で融通の利かない上司と、やつぱり真面目で頑なな部下の組み合わせだと、話がちつとも進みやしない。今頃鬼の居ぬ間のなんとやらで存分に羽を伸ばしているであろう三途の河の渡し守であれば、このようなこともなかるうに。

「いえいえ、ここは私が」

「いえいえ、やつぱり私が」

忘年会の会計時におっさん連中の間で交わされるような鬱陶しい会話は、結局それから五分以上も続けられることとなった——

S

映姫が楽園と呼ばれる幻想郷担当の閻魔であるように、ここ京都にも閻魔の役は設けられている。

八代巫姫・ヤマラクヨウ——この度めでたく結婚し、ハネムーンに出かけた彼女は、その間の代理として同期である映姫を指名してきた。無論、映姫も幻想郷における職務があるため、代理など無理とはつきりきつぱり断つたのだが、十王から「きみ、ヒマでしょ？」と言われて返答に窮し、結局あれよあれよという間に決定してしまったのである。宮仕えの辛さとはいえ、映姫の顔がニガヨモギを噛んだように歪むのも致し方あるまい。

「そもそも閻魔の癖にデキちゃつた婚つて何よ。いつの間にかそんな……こちらと彼氏どころか出会はずらないうつてのに。そもそもあいつは昔から要領だけはよくて、いつもいつもこつちに皺寄せが……おまけにハネ

「これだけ暑いのはメリーのせいよね」

完璧な独り言だった。もしも聞き耳を立てている誰かがいたら、私が誰かに向かつて話しかけたと勘違いしたことだろう。もちろん言葉に意味はないし、メリーはここにはいない。私は一人で、季節は夏だった。

夏。
清々しいくらいに、夏。

「八月も半ばなのに、何故こんなに暑いのだよ……？」
今度は独り言には聞こえなかったのか、通りすがりの女学生がびくりと私を見て足早に去っていく。逃げるようだ、というか逃げられたのかもしれない。変な人だと思われたのかもしれない。しれない、というか、そのものだろう。そんなことを気にしてられないほどに暑くて、私は手をばたばたと振って顔を仰いだ。
暑い空気がかき混ぜられて余計に暑かった。

夏。
みーんみんみん、と蝉が鳴く。

じーいじいじい、と蝉が笑う。

喫茶店のテラスから見える空は泣きたくなるくらいに青空だった。雲はない。ついでに風もない。真昼だから月も星も見えず、したがって時間も場所もわから

ない。私の能力は夜にならなければ意味がないのだ。ただ、太陽は真上にあるから正午近くだということはおわかるし、場所は地元なので把握している。京都の外れ、学校側の喫茶店にあつらえられたオーブンテラスで、私は独りまんじりともなくアイスコーヒーを飲んでいた。

「あ・つ・い・わ——」

いくら言葉で繰り返しても暑さはどうにもならない。テラスには日よけのパラソルが差してあつたけれど、強い陽射しは容赦なく空気を蒸していく。背後のクーラーがきいた店内に比べれば天と地の差だった。

何も好きこのんで天と地の「地」にいるわけじゃない。そこまで私は変人ではない。

単に、店内が満員だっただけだ。

「コーヒーを買う前に気づくべきだったわね……」

大きめの紙コップに突き刺さったストローに口をつける。ちゅー、と吸い込むと、温くなり始めたアイスコーヒーが喉を潤してくれる。自分でいれたアイスよりは薄いけれど、今は冷たさがあった。アイスコーヒーを買わなければ他の場所にいくなり何なりできたけれど、買ってしまつた以上はまさか突き返すわけにもいかない。コーヒーを飲み終わるまでは、ここでこうしていなければならぬ。

夏で、

暇だった。

八月と言えば休みだから——と考えるのは甘い。目の前の道を半袖半ズボンで駆けてゆく小学生たちにはわからない悩みだけれど、人間、時と場合によっては夏休みだろうが何だろうが学校まで出てこなければならぬこともあるのだ。あまつさえ、朝一番と夕方最後以外の講義以外はやることもない、というひどい時間的拘束を受けることもある。普通はそうでもないけれど、あくまでも時と場合によっては、そういう不条理なことを味わわなければならぬのだ。誰のせいかなと言えば、きつと私以外の誰かのせいに違いない。マエリなんとかさんの陰謀だろう。

言い訳完了。

そんな風にして、あまり語りたくない理由で私はここにいた。午前の講義が終わり、午後の講義まではまだかなり時間がある。学校まで戻ってもやることはないし、家にまで帰るのは面倒くさい。どこかへ遊びに行くには暑さでやる気がない——そんな、暇が所在なく傍らにたたずんでいるような状況だった。

秘封倶楽部の活動も、できはしない。

オカルトサークルの活動時間は基本的に夜だし——何よりも、メリーがいなければどうしようもないのだ。

ようは、暇を持って余していたのだ。

脳が蕩けてしまいそうなくらいに暇だった。「隕石が落ちてこないかしら」

雲も星も見えない空を見上げながらぼそりと呟く。

先日メリーと見た映画を思い出したのだ。空から超巨大隕石が落ちてくることを察知した合衆国が総力をあげて宇宙へと乗り出すのが、落ちてくる巨大な星こそが本当の地球だったという、面白いのか面白くないのかよくわからない映画だった。ちなみにオチはと言えば、どちらが本当の地球なのかもはっきりしないままに、合衆国の秘密兵器によって衝突はまぬがれ、二つの地球はまた広い宇宙で離ればなれになって二度と巡り合うことはなかったという、予算と時間を斜めに投げ捨てたような感じだった。

メリー曰く、

「これ、続編があるそうよ」

とのこと。見たいような、見たくないような。そのうちメリーが持つてきたら一緒に見ることにしよう。

そんなとりとめのないことを考えながら、視線を空から地上へと戻す。隕石が落ちてくることもない平和な駅前には、人の行き交いで賑わっていた。そのせいで、気温が一、二度あがっているような気もする。

秘密の匂いは、どこにもなかった。

緑の次は赤。赤の次は紫色。

次々に炸裂する煌めきを、瞬きさえ惜しんで眺めていた。一度きり、一瞬で散ってしまふ轟音の花を、一発として見逃すまいとじっと見続けている。

そこでふと思ひ起こした追憶は、陽気な喧噪に縁取られた隅田川の光景だった。河原に並んだ緑日の営み、酒とおっちゃんとチヨコバナナとキヤラクターお面とイカ焼きと河面にも屋根にも反射していた、あの色とりどりの花火。日本の夏だったと思う。まだ小学生だった時分、初めて県境を越えて旅行した夏の記憶。

美しさと楽しさだけなら、今日は、その隅田川にだって見劣りしないと早苗は本気で思っていた。

天を眺めている。

牧歌的で前時代的な幻想郷に似付かわしくない、打ち上げ花火の派手派手しさ。しかしそれ故に明確に匂い立った非日常性の薫り、つまりはハレの日に、夢見心地の胸は大人げなく高鳴って仕方がなかった。大人が一斉に、子供に戻ることを許される夜を胸一杯に吸い込む。薄い煙と火薬の匂いがした。鈍重な破裂音がお腹にずどおん、ずどおんと響く感覚が、子供時分から早苗は堪らなく好きだった。それは今も変わらぬ。天を眺めている。

「……早苗」

「なんでですか？」

「……うふふ」

「な、なんですか神奈子様、気持ち悪い」

くすくす笑いながら早苗はほんの少しだけ神奈子を見て、またすぐ頭上の花火の音に視線を誘われる。

神様と一緒に眺める花火を、存分に楽しんでいる。博麗神社の縁日に誘ってくれた霊夢の優しさに頭を下げ、後ろ髪引かれる思いを断ち切った早苗は今年、守矢神社の神様二人と共に夏祭りを過ごすことを選んだ。新しい世界へと引越した御社で、記念すべき最初の夏くらいは、自分を選んでくれた神様と一緒に、水入らずで過ごそうと決めていたのだ。

神事の神々しさや堅苦しい格式を離れ、まるで本当の家族のように触れ合える夏の夜が心地よかった。年甲斐も気温の暑さもすべて忘れ、神様をお母さんに見立て、思い切って寄り添い甘えてみたくなる熱帯夜。

「早苗」

「だーから、なんでですか？」

「……浴衣、似合ってるね。可愛いよ早苗」

心を読まれたようなタイミンゴ。

或いは、情に篤い殊勝な心がけに、神奈子と諏訪子以外の神様が早苗にくれたご褒美——だったろうか。

——顔がぼん、と赤い花火になる。

「……………と、とーぜんじゃないですか！ 私が着てるんですから」

——今から一年前の、それが夏の記憶。

たこ焼きもあてもんもない。ヨーヨー釣りも綿菓子も射的も無ければ提灯もランタンも祭壇もひもろぎも準備していい静まりかえった守矢神社。その、初めて見るほど暗い境内。温い風と、花火の色。

「……花火見物にはやつぱり、冷酒だな」

「ごちそーさまですー」

そんな飾りつ気のない言葉をいくつも交わし、襟元をゆるめて神様とお喋りした。人間との垣根もその日だけは越えて、心地よく夜空を震わせた破裂音をまた早苗のときめきの視線が追いつけて、一瞬にして全ての言葉を忘れてやはり、天を眺めて。

「……………はあー……………」

「……………」

神奈子が実は、まるで母親のような笑顔で眺めているのにも気付かなかった。つまりはその、浴衣姿。

諏訪子が実は、そんな二人を更に横からニヤニヤと眺めているのにも気付かなかった。

つまりはその、睦まじい、人と神の団欒の一夜を。

幻想郷に来たら何だか風情もへったくれもなくなつたハイビスカス柄の袖を、汚れないよう大事に膝上へ寄せた早苗の手。

一年目の夏の終わりに、二年目の夏の約束をした。

「神奈子様、来年は……屋台の方に行きましようよ。」

神奈子様も諏訪子様も、もう堂々と、人間の前を出歩いて皆さんとお喋りできそうですし」

「そうだねえ……………」

三人の安らぎは確かに手を繋いで、違えた世界の新しい夏を、三人が三人ともが楽しんでいた。

花火の音を縫うように、閑かな夏風が吹いていた。

「私、屋台も好きなんです。だから、ね、絶対」

「……………はいはい」

最後まで、早苗ははしゃいでいた。そして夜は、子供のよう疲れ果ててぐっすりと眠つた。

そう。

神様と一緒に、あの花火にさえ手が届きそうだった。そんな待ちに待った夏祭り、その静かな夜こそが、

「……………分かった。考えておくよ」

東風谷早苗にとっての、確かな夏祭りだったのだ。

異常気象というものには二種類あって、それは客観的な異常気象と主観的な異常気象だ。もちろん、客観的と言っても、誰かが「異常だ」と判断しているのには違いないのだから、どうしたって主観からは逃れられないのかもしれない。しかし、ここで言う主観的な異常気象というのは、要するに、平均的な天候よりも暑かったり寒かったり長雨だったりするのが単に気に食わないという話にすぎない。つまり、干ばつだの氾濫だのといった物騒な事柄とは程遠いながらも、パニックに陥った際の一種恍惚とした感覚からも程遠い、神経を紙やすりで削られていくような不快感を催すものだ、と言える。しかし考えてみれば、統計的に作成された「平均的な天候」なるものにも実際の天候がピツタリ沿うことなど、果たしてあるのだろうか。してみると、異常気象なるものはまったくの幻であって、地球そのものに文句を言うわけにもいかない私たちが、「まったく異常のやつめ」と愚痴るためだけに存在しているのかもしれない。

そのようなことをつらつらと考えながら、私は里の中通を干し芋のように歩いてきた。もちろん干し芋は歩かないけれど、気分的に干し芋のような心持ちだったので、おおよそそのように表現しても差し支えないと思う。世の中の物事について、よく「程度の問題じ

やない」と意見をつける人がいるが、馬鹿を言うんじゃない」と私は思う。世の中の物事なんて、大抵は程度の問題なのだ。その証拠に見てみるといい、肌突き刺さる恵みの陽光は、里の家々をまるで芝居の書割めいた白々しさに染め上げ、明らかに普段より少ない道行く人々の口を、一様に呼吸困難な魚のごとくパクパクと開けさせているじゃないか。

もう今日は行くのをやめて明日にしてしまおうか、とも思っただけれど、しかし通りがかりに横目で見やっただ龍神様の像は明日も今日とそう変わらないだろうことを告げていて、私の肩を一層としぼませる。普段は涼やかな光沢を見せるその石像も、今は上に卵を落としたらまず間違いなく目玉焼きにできるだろうと思われ、心などないはずの龍神様も、心なしか（まあまあうまいこと言ったか）ぐったりしているように見えた。あるいはそれは、その白く静かな光をたたえる瞳を通して、私自身の心持ちを反射しているから、なのだろうか。実際私はぐったりしていた。よもやこの距離で必要もないだろうと、水筒の一つも持ってこなかった自分の愚かさが恨めしい。むしろ気色が悪いとすら感じるぬるい微風が力なくはためかせた眼前のノボリには、宇治金時と墨痕淋漓に大書してあった。そりゃあ、これだけ水分が恋しい日には、でっかく主張もしたくな

るといふものだろう。何でも聞いた話によると、物といふのは大きければ大きいほど、ほかの物を引き付ける力が働くのだという。その引力の法則にしたがって宇治金時へ危うく囚われかけた私はしかし、今月のお小遣いは既に底を尽きかけているということを思い出した。何もかも異常気象が悪いのだ。ついでに私が日々あれだけ売り上げに貢献してあげたというのだから、甘味屋も少しは値引きしてくれて良かったんじゃないだろうか。そして何より、当主であるはずの私になぜお小遣いなどという屈辱的な制度に甘んじなければならぬのか。

怒るのはよくないと分かっていた。それは何も貪瞋痴というような抹香臭いお題目によるものではなく、単純に怒ると体温が上がるからだ。そしてそれはそのまま体力の消耗に繋がった。しかしそうして無理にでもエネルギーを作り出さないと、とても目的地まで気力が保たないだろうというのも事実であり、言うなれば私の私による体力と気力のチキンレースと言えた。途中で体力チームが敗れたら、誰か助けてくれるだろうか。普通には死ねそうにない私とはいえ、熱中症で死んだとなるときすがに先代先々代及びそれ以前の私に申し開きの立ちそうもない。では、なぜ私が熱中症などで死ななければならぬのか。その理由は

十二分に承知していた。直接的には異常気象のせいであり、間接的にはあの人が素直に喋ってくれないからなのだ。つまり、あの人が私を殺したといつても過言ではない。あの、常に底の見えない笑みをたたえていて、出(で)不(ふ)精(せい)だから話を聞くのも一苦(いちく)勞(らう)、姫らしいが何の姫なのかは分からない、そして、まあ、とんでもない美人の……あの人だ。

間一髪で体力チームは瓦解(がかい)を免(ま)れ、目的地であるこの人の家へ到着できたことに私は安堵(あんぶ)の息を漏らす。漆喰(しつこ)に塗り固められた見事な白壁は、今日に限ってはただ日光を反射してまぶしいだけだった。私は「頼もう！」と声を張りつつ引き戸を開け……ようとし、さすがにそれは無いだろうと思ひ直して一呼吸ついた。問題はあの人であって、この人ではないのだ。いきなりケンカ腰で来られても困るに違いない。よし、私は冷静。稗田阿求は常に淑女です。

「ごめんください、慧音さ——」

「暑(あつ)苦(くる)しいのよあなたの能力は！ この暑いのに！ というかあなた自身が暑(あつ)苦(くる)しいから早く帰(かえ)って竹炭(たけすす)でも焼(や)いてなさいよ！」

「あ!? 別に呼ばれて来ているわけでもないのに態度でかいわね! 暑いならあんたがとっとと帰(かえ)って兎鍋(うまなべ)でも作(つく)ってればいいんじゃないの!？」

時は無限であるか。

誰かが始まりを認識した時、その始まりは他の誰かにとつての途上に過ぎない。

また誰かが終わりを自覚した時、やはりそれは他の誰かの経過でしかないのだ。

有限である始まりと終わりがいつまでもそこかしこで繰り返される限り、本当の最初、本当の終わりと云うものは誰にも理解し得ないのだろう。

故に時は無限であつた。

しかし、今やそうではない。

始まりを知る事はもはや不可能だが、終わりを知る事は可能となつたのだから。

生命の時間、星の時間、銀河の時間、宇宙の時間、時の時間。それら全ての時間と付き合いきれるだけの、えもいわれぬ永遠の時間。

無限の中を永遠で居続けければ、それは、終わりを知る資格を有するに十分と言えるだろう。

最初は単なる知的好奇心。

ただ、その好奇心を抱いた貴き姫は、類稀なる行動力と実行力で、それまでのほぼ全てを引き換えに、永遠と共犯者を手に入れたのだ。

嗚呼——後はただ在り続けるばかり。

「ま、やめておけばよかつたと思わなくもないけど」

「はえ？」

永遠亭。兎が小騒がしい程度で概ね静かな屋敷において、ふとした蓬萊山輝夜の呟きに、鈴仙・優曇華院・イナバは思わず聞き返していた。

「ん？」

だが不思議そうに見上げてくる鈴仙に対し、輝夜はさも何でも無さそうに小首を傾げて見せる。そのついでとばかりに、横になつて自分の膝枕の上に頭を乗せる鈴仙の喉をこそぐつた。

「ひゃあん……！」

びくつとし、変な声を出しつつも抵抗する素振りはない。それは慣れたものだからであり、鈴仙は輝夜のペットであるから、当たり前前のスキンシップである。

それから輝夜はペットのくしゃくしゃとした耳を弄り弄りして妙な声を出させながら、自室の天窓をゆるゆると見上げた。

差し込む月光が僅かでも映えるよう、いつものように室内の灯りは消されている。薄闇の中を慎ましげな光が柔らかく輝夜に降り注いでいた。

穢れた地から見上げる故郷の、げに麗しき事よ。

鈴仙の耳を矯正するようにしごき、心なしか彼女の

足が伸びつつ微癢びげいれん擧あげているのを無視して、輝夜は長く、ゆっくりとした息を吐く。

溜息とも付かないそれは、目尻に少し涙を浮かべた鈴仙が目を瞬かせるには充分だったが、学習したのか今度は何も言わなかった。

輝夜は膝の上のペットの頭を好きに弄りつつ、何となく思い出していた随分昔の事を再度思う。

偶然が折り重なったあの必然は、要するに私が原因であり、だから私は永琳共々こうなってしまうのであって。恐らく永琳はその後の事を憂慮うれして、罪滅ぼしの名目で私の後を追ったのでしようけれど。

「……やっぱり、もうちよつと後先考えて行動するべきだったかしら」

永遠の時間。

時の終わりを知る為だけに得るといふのは、無知無謀愚劣愚策の極みだったろう。

少し考えれば分かる事とはいへ、それでも当時の私は終わりを知る事が出来るというその一点に恋い焦がれ、他の全てが分からなくなっていたのだ。そんな当時の自分を擁護するつもりは更々ないし、蓬菜の葉によつて慢性的な刺激不足に陥おとつた昨今では、先程のように後悔を覚える事など幾百回いくひゃくかいだろうか。

無聊ぶりやうの慰めなぐさを求める日々は、退屈なりに退屈ではな

いが、それはそれでちつとも面白くない。

もつとも、つい最近の騒動以後はそれなりに面白みがあると言えたが……それでも、あれやこれやと引つ張った所で五年もすれば飽きってしまうだろう。

環境や状況の変化による退屈あじ凌しのぎが長持ちしない事くらいは重々理解している。

とどのつまり、永遠と言ふのは退屈が付いて回るものであり、それを如何に巧くあしらひ続けるか、或いは上手に付き合うかという事が肝要だ。

元々月人であつたから、その辺りについては不得手では無いけれど。でもそれは周囲にも同様の月人がいるからこそだと考えた。傍そばに同類がいればこそ、長生きも苦にならないというもの。

さてその長生きに必要な私の同類、蓬菜人は自身を含めてたつたの三人。一応退屈あじ凌しのぎを続けるには十分な人数だけど、内一人がいつまでたつても非友好的態度を貫いてくれるのには困つてしまう。

その彼女と一度面と向かつて事情を説明し、あなたのそれは言うなれば逆恨みによく似ている、と指摘したのが拙ちがかつたか。……間違つてないのに。

「……………まあ、それはそれとして」

敢えて口に出し、輝夜は脱線した思考を元に戻そうとする。

「……」

「いい加減決めたらどう？」

「うるさいな、今この瞬間こそが戦況の分かれ目なんだよ。急いで事は仕損じろ。ただ前に突き進むだけではいけない事を、私は学んだわ」

「それはまた、殊勝なことだ」

「ええそう、そうよ。あいつに——靈夢に勝つためならば、私は己の矜持を捨てることも厭わない。それくらい覚悟で挑まなければ、あいつには勝つこたないからね」

「そうなのよ、ともう一度自分を納得させるように呟いたレミリアが、腕を組んだ姿勢のまま押し黙る。盤台の前に、敷いた座布団の上に胡座を組み、開いていた扇子をはちんと閉じる姿は、行儀こそ悪いものの、正しく棋士のそれ。しかし、如何せん身に纏うロリータファッションが全てをぶち壊していた。

——はてさて。

盤台の横に並べられた、ままごとにも使うような小さなテーブル。その上に置いていたティーカップを手にとって、ほうと一息。

一分の隙もない完全な洋室で、豪華なベッドや、そ

れだけでもアンティークとして価値がありそうな額縁に入れられた絵画を横目に、真つ赤な絨毯の上に若草色の座布団を敷いて、紅茶を啜りながら盤台を挟んで相対する。

片や全身が埋もれそうなほどのフリルがあしらわれたロリータ服に、見事な筆文字で『麗美理亜』と書かれた扇子。

片や流水を模した蒼の着物に、真つ赤な紅茶の入ったティーカップ。

この節操のない和洋折衷。最初こそ随分とチグハグなものだと思っていたが、レミリアの突き抜け過ぎたあれこれのセンスも含めて、最近ではすっかりと慣れてしまった。

『麗しく美しく、理知的でなおかつ理性的、そしてロシアだとかアジアだとか、とりあえずでつかいものに使われている「亜」は私の雄大さを表しているのよ』初めて聞いた時は、それはひよつとしてギャグのもりなのかと思っただけだ、残念な事にこの幼女はどこまでも本気だった。そしてその後ろでは、彼女の一番の従者が涙を流して感激していた。

ほんと、どこまでも突き抜けてる連中だわ。

『軍人将棋は知っているか?』

珍しい生き物が冥界に来たと思つたら、突然そんな事を言われたのが一月余り前の事。

聞き馴れない言葉にはたと首を傾げていると、傍らに控えていた妖夢が勢いよく身を乗り出して、

『軍人将棋だつて!』

『知っているのか妖夢!』

『軍人将棋……その源流は中国宋代、時の武將達が戦場にて自軍と敵軍の位置關係を示すのにチャトランガの駒を用いた事に発する。訓練された軍隊は指し示された盤上の駒の如き進軍で敵陣を潜りぬけ、必ず自軍を勝利に導いたという……。戦乱の世が鳴りを潜めた後も、シャンチーの駒の裏面を使い、かつての功績を振り返る者は少なくなかった。しかしそこの記憶の食い違い、誇張などから反発する者が現れるのも必須ならばと駒に用いたシャンチーに倣い、盤上にて決着をつけようとしたのが軍人将棋の始まりなのである。

一説では度重なる戦を取めるために、戦いを模した遊戯を高僧が作つて時の権力者に献上したのが始まりとも言われるが、定かではない——と、民明書房刊「盤上遊戯」からですが

『長つたらしい説明台詞をありがとう。でもこれつて、字面でやると今一つ迫力が無いのが、なんとも残念な

ところよねえ』

『ですわね』

『……楽しそうだな、お前達』

『で、その将棋もどきがどうしたの?』

『……………』

『お嬢様、私が話しましょうか?』

『いやいい、自分で言う』

これまた珍しく神妙な顔付きで語り出した彼女曰く、三年ほど前に香霖堂で軍人将棋の一式を見つけ、珍しいという理由だけで買って見たのはいいものの、勝負を挑んだ靈夢に完膚無きまでに叩きのめされたらしい。『当時その所為で不貞寝をしていたら、妹が暴れたり小悪魔が下らない事をしてかしたり、おかげで咲夜がポロポロになつたりと大変だつたわ』
ねえ、とレミリアが後ろに視線を投げると、控えていた咲夜も『酷い目に遭いましたわ』とでも言うように肩を竦めてみせた。

そんな無駄話を交えつつ彼女が語つた内容を纏める、なんてことはない、単純なことだつた。

——三年間で靈夢に九九九連敗している。

——もうこれ以上負けられない。

——誠に遺憾ではあるが、特訓の相手をしろ。そういう事だ。

夏も真つ盛りである。現世から隔離された幻想郷でセミが一週間の生を謳歌し、やかましく鳴き続けている。ましてや幻想郷の中でも魔法の森の中にいるセミは格別にうるさい。

魔法の森の外れにある古道具屋、香霖堂の店主である所の森近霖之助はそんなうだるような暑さすら気にしていられなかつた。

「まいったな、いつもは放つておいても入り浸るのに必要な時ほとんど来ないなんて……」

無人の住居兼店舗の中をブツブツと吹きながら歩き回る。

客が誰も来ないという状況であるが、それはいつもの事。霖之助を悩ます事柄は別にあつた。腕を組みながら店内を何度往復したのか解つたものではない。

事の始まりは簡単である。

霖之助は古道具店を営んでいるが、来客はほぼゼロと言つても差し支えは無い。

立地も悪ければ品揃えも来客向けではない。そもそも幻想郷の人間が決して安全とは言えない魔法の森に踏み込む事はないし、品揃えに至っては霖之助が拾つてきた使用方法もわからない外の世界で不要になつた

品なのである。

加えると、霖之助自身ですら自らの店の商品を「趣味だから売らない事にした」などとのたまう事もよくある話であつた。

ともあれ、香霖堂の主な仕入れ方法は『外の世界から流れ着いた物を拾ってくる』事である。その外の世界から流れ着いた物が溜まる場所、そこに一匹の妖怪が住みついてしまったのだ。

霖之助は幻想郷の住人で、しかも半妖であるが、妖怪退治ができる類の人間ではなかつた。彼の能力は「物の名前と用途が判る程度の能力」であり、荒事に向かないという彼自身の自覚は正しい。

だからこそ霖之助は妖怪退治のできる人間として、いつもだったら放つておけば来るはずの博麗霊夢か、霧雨魔理沙に頼もうと思つていたのだ。報酬としてツケの何割かを減らしてやればいいかなどという考えの元、彼女らの来訪を待つていたのだが、こういう時に限つて二人ともやつてこない。ならばこちらから出向こうかとも考えるが、霊夢の住む博麗神社は遠く、魔理沙の住む家は魔法の森の奥にあり、迂闊に迷つたらそれこそ最後である。

「どうしたものか……」

からん、からん。

霖之助の思考を打ち破るようにして、来客を告げるベルが軽やかな音を立てた。

「こんにちわ」

「やあ、いらつしやい」

ベルと同じような涼やかな声が店内を吹きぬける。

トレードマークの洋傘をぶら下げて現れたのは、果たして人ではなかった。長いブロンドヘアを優雅に風にそよがせながら、口元には余裕たっぷりの微笑み。少女のようであり、また妖艶な美女を思わせるようなたたずまい。目の当たりしたところで何者なのか判別しかねる印象を与えるのは隙間妖怪、八雲紫である。

「珍しいですね、貴女が来店なさるとは」

「大した用はないのですけどね」

猛暑の日中だというのにその名のような紫のゴシック調ドレスを着ながら、汗一つかかずに涼しげな顔をしている紫を見ながら、霖之助は内心で少しばかり眉をひそめる。

「久方ぶりに貴方がどうしているのか気になったのですわ」

「はあ……そうですか」

八雲紫といえば大妖怪である、という知識は稗田阿求によってしたためられた幻想郷縁起により、広く知られている。

しかしながら「実際にはどういう妖怪なのか」というのは実はあまり知られていない。そもそも神出鬼没であり、普段をどこで過ごしているのかすら知られていないのだ。広くはない幻想郷であるが、そのどこにでも彼女はいるし、そのどこにも彼女はいない。

「実は少し困った事になっていましたね」

「客が来ないのはいつもの事ではないのですか？」

境界を操る程度の能力と幻想郷縁起に記されているが、それがどういった事なのか、具体的には何ができるのか、妖怪の中でもことさらに博識で、何もかもを見据えたような口ぶりの彼女は常にミステリアスである。ぶつちやけると、胡散臭い。

「それはいつもの事ですが、今はそれ以外の事で困ってるんですよ」

「あらまあ、いったいどうなされたのですか？」

そんな紫に事情を説明するべきなのか、少し迷う。

しかしながら紫は妖怪の賢者とも言われる存在。その知恵に頼るのもいいかもしれない、と思いついて霖之助は事情を説明した。

外の世界の物が流れ着く場所に妖怪が住みついてしまった事。

妖怪特有の気を感じ、一目散に逃げ出したためにそれがどんな妖怪かもわからない事。

黒く、美しい翼が大きく空を裂いた。

仄暗い地下ではなく太陽が輝く地上だからこそ、その美しさは際立った。細やかな光の粒子を受けては羽根の一枚一枚が艶やかに煌く。大きく羽ばたいて鮮やかな軌跡を描く度に抜け落ちるそれは、地べたから彼女を仰ぐ者への施しの様にも見えた。

見れば誰もがその様に息を呑むだろう。

しかし残念かな。その姿には優雅さと呼ばれるものが圧倒的に足りていなかった。翼という物は滑空の為に使うのが主な目的であり、無駄にそれを上下させる為に付いているのではない。飛び上がり、十分な高度に達すればそこからは上昇気流に任せればいいのだから。だが地下と地上ではどうやら勝手が違うらしく、鳥は何時まで経ってもその翼を忙しなく動かしている。

そんなに急いでどこへ行くというのか――

誰かがそんな事を呟いたような気がした。

勿論、彼女の耳には届かなかった。

間欠泉は止まる事無く湧き続けている。だがその勢いは、以前よりも確実に弱まっていた。

放り込むだけであつたという間に固ゆで卵ができていた程高温だった湯も、今では温泉卵を作るのが精々といったところである。

どこぞの迷惑な神様によつて引き起こされた、地上から地下を通じての異変の名残も、日にち葉によつて緩やかに終息していこうとしていた。

やはり幻想郷には平穩が似合う。

博麗の巫女である霊夢はそんな事を思いつつ、縁側でのんびりとお茶を飲んで小さく嘆息した。

陽射しは麗か。

こんな日は一日中何もせず、ぼうつとしていた。時間が流れるままに怠惰に過ぎ、空腹になれば食事をし、眠くなればそのまま意識を手放せばいい。

霊夢はただ穏やかな時間を望んでいた。

刺激なんてものは偶に存在する程度でいいのだ。

今日の夕飯は何にしようか、季節の野菜を使って天麩羅でも作ろうか。そしていつもよりも上等なお酒を少しだけ飲んで、虫の音でも聞きながら明日を待つのも悪くない。

そんな風に今日の終わりの事を考えている、まだ太陽は南中の位置にもないというのに。

だが、そんな彼女の時間は容易く打ち破られた。何者かによる高高度から神社の庭へと、垂直に突き刺さるような着地。その瞬間に、一陣の風がそれを中心に起こった。ここ数日掃除を怠っていたせいで、散

在していた木葉が舞い上がり、また土埃がその者の正体を視認させるのに幾許かの時間を持たせる。

しかしこのような出来事は何も初めてというわけではない。霊夢の交友関係はそこそこに広いとは言っても、ここまで傍迷惑な登場をする人物は一人しかいなかった。

「よつ、今日も暇そうで羨ましい限りだ」

時代遅れにも思える黒い衣装に身を包んだ魔法使い、霧雨魔理沙その人である。少しずれた帽子の位置を直しながら、衣服に付いた砂を払う仕事をした後、跨っていた箒の穂先を上にして地面を軽く突いた。

「あなたのせいで折角掃除したのに台無しだわ」

「嘘付け、どうせ今日は朝からごろごろしてただけなんだろう。頬つべたに板の痕があるぞ」

「失礼ね、そんな長い間寝転んだりしてないわよ。今日はずっと、お茶飲みながら座ってたんだから」

「ほう。ずっと、ねえ」

語るに落ちたな、と言って魔理沙は笑った。そのまま霊夢のいる縁側へと歩を進め、自分もそこへどっかりと腰掛ける。年頃の娘だというのに随分と大胆な所作だった。

「それで今日は何の用かしら？」

「おいおい、その前にお客にお茶の一杯も出さないのかこの神社は？」

「素敵な賽銭箱はあつちよ」

「森で採れた草なら入れてやってもいいけどな」

何時ものように軽口を言い合うと、魔法使いは履いていた靴を脱いだ。その背中に巫女が声をかける。

「あ、ついでお湯足してきて」

「いいぜ、それなら茶葉も足してきていいか？ 濃い方が好きなんだよな、紅茶はそうでもないんだけど」

「私は薄いほうが好きだから駄目」

「節約するほど生活に困ってるわけでもなからうに」

「清貧こそが博麗の美德なのよ」

「初めて聞いたぜ、そんな事」

「今、作ったからね」

そんな自分勝手な言葉に魔理沙は苦笑しつつ、急須を手に縁側を抜けて台所へと向かう。

きいきいと板張りの床が軋む音が、霊夢の耳に何故か心地よかった。